

特集 八朔祭り今昔

歴史の流れ



昭和57年に復活した時の大名行列
(高尾町通りを巡行する行列)

本祭りとは神輿の巡行を行うこと

本祭りとは神輿の巡行を行うことで、居祭りとは神輿を出すだけで巡行は行わない祭りのことをいいます。

本祭りとするか居祭りとするかは、農作や一般景気、居祭りの続き具合で決められ、本祭りの時には生出神社から繰り出す神輿の巡行や、下天神町が行う大名行列と各町がそろいの衣装で曳く屋台はきつと見事なものだったことでしょう。

今は、交通事情などにより神輿の巡行は行われていませんが、形式を変えた八朔祭りが今もこうして続いているということは、地域に関心が薄くなっている現代社会には欠かすことのできない大切な行事ではないでしょうか。何気なく「おはつきく」に参加している皆さん、実はすばらしいことを体験しているのですよ。

生出神社の神楽保存会では小中学生がその伝統を引き継ぐように一生懸命練習に励み、地域のために何かを受け継ぐようとしています。子どもたちが地域を見直し、歴史を継承していくということ、すばらしいことではありませんか。

この「おはつきく」を仕切るのが総行司で、年番制となっていています。当番になった総行司は、その年の祭りは本祭りとするか居祭りとするか決めなければなりません。それによって、準備の日程や内容・費用などに大きな違いがあるからです。



八朔祭が県下で有名になったのは、付け祭りとして繰り出す大名行列があったからといっても過言ではないでしょう。全国的にも有名な大名行列といえ、加賀の百万石祭や格式十五万石の箱根の大名行列、十万石の三条市大名行列などがあります。

県内では、大正末まで行われていた上暮地の百万石大名行列、本栖の奴ぶりと称する大名行列、精進の大名行列などをあげることができ、歴史の古さと由緒を比較して、「八朔祭」の大名行列はその最たるものだといえるでしょう。

本祭りともなると、子どもたちや若い衆はこの祭りの日を待ち続け、一カ月ほど前から心を弾ませてその準備や練習に余念がありません。



昭和28年の大名行列。今とは、衣装も形式もちょっと違いました。

九月一日、真夜中の午前一時、一番太鼓の音が谷村の町に響きわたり、祭りの始まりを告げます。三番太鼓とともに「御支度」の合図で寄り集まり、支度を整えて生出神社に下り祭式が執り行われ、いよいよ行列のおたちです。十萬石の格式を華麗に、また勇壮

始めた当時の大名行列は？

一年間のうつけきしたものが、祭りに参加することごとく発散されてしまうのです。祭りには不思議な力がありますね。

なんで下天神町が大名行列？

に「下にー下にー」と先陣の号令で谷村に向け行列が動き始めます。当然のことではありますが、この行列を高いところから迎えることは許されません。直ちに戒められてしまいます。それはかりか、軒から突き出たようなものがあつて、巡行にさしさわるようなものがあると切り落とされてしまうのです。祭りとはいえ厳しいですね。行列の中の奴さんは、当時もひょうひょうとして踊るそのユーモラスさが人気を集め、盛んな声援を受けたそうです。

いづつごろから、なぜ下天神町が大名行列をやるようになったか知っていますか。ちょっとひも解いてみましょう。

谷村町を治めていた秋元谷村藩主が川越に転封になった宝永元年（一七〇四）に行列道具一式を下天神町に置きみやげとして贈ったと伝えられ、また足軽が行列の仕様を教えこんだともいわれています。

下天神町の人たちの手で行列が行われるようになったのは、詳しくはわかりませんが、おそらく享保年間（一七一六ー一七三六）ごろであろうと考えられています。